

- Deriving Drop-Size Distribution and Vertical Air Velocities from VHF Doppler Radar Spectra. *J. Atmos. Oceanic Tech.* **3**, 623-629.
- , A. Mizutani, M. Matsuo, S. Fukao, and S. Kato, 1987: Further Discussion on Deriving Drop-Size Distribution and Vertical Air Velocities Directly from VHF Doppler Radar Spectra. *J. Atmos. Oceanic Tech.*, **4**, 170-179.
- Yamamoto, M., T. Tsuda, S. Kato, T. Sato, and S. Fukao, 1987: A Saturated Inertia Gravity Wave in the Mesosphere Observed by the Middle and Upper Atmosphere Radar. *J. Geophys. Res.*, **92**, 11993-11999.
- , T. Tsuda, S. Kato, T. Sato, and S. Fukao, 1988: Interpretation of Structure of Mesospheric Turbulent Scattering Layers in Terms of Inertial Gravity Waves. *Physica Scripta*, **37**, 645-650.
- , T. Tsuda, T. Sato, S. Fukao, and S. Kato, 1989: Full-Correlation Analysis of Turbulent Scattering Layers in the Mesosphere Observed by the MU Radar. *Pure Appl. Geophys.*, **130**, 605-615.
- Yamanaka, M.D., S. Fukao, H. Matsumoto, T. Sato, T. Tsuda, and S. Kato, 1989: Internal Gravity Wave Selection in the Upper Troposphere and Lower Stratosphere Observed by the MU Radar: Preliminary Results. *Pure and Appl. Geophys.*, **130**, 481-495.



吉野正敏著

風の世界

東京大学出版会 1989年3月

224頁, 2,400円

御存知のように著者は学生時代から40年このかた風を主とした小気候の研究にたづさわってきた気候学者である。著者によるこの方面の研究を大系づけた著者，“新版小気候”（地人書館），“Climate in a small area”（東京大学出版会）については御存知の方も多いことと思う。

さて本書は旧著の焼き直しなどでは決してなく、新構想の下に組み立てられた別のスタイルの本である。恐らく大学でのある講義ノートに基づいて章立てしたものと思われるが、研究から得たエピソード、特に現地を踏んだ者でないと書けないことが豊富にもり込まれていて楽しい。本書中の写真はほとんど著者の撮影したものだそう、それだけリアルに話が伝わってくる。

本書はつぎのように8章から組立てられている。すなわち、1. 風の四季、2. 局地風、3. 偏形樹、4. 風の民俗学、5. 都市の風、6. 風のエネルギー、7. 風と災害、8. 大気の循環などである。

内容紹介に代えて本書中興味をひいた2、3の事柄を紹介しよう。

1. ロッキー山脈の東の山麓に冬から春にかけて吹く西風強風は、チヌックでなく正しくはシヌックと呼ぶそ

うだ。カルガリオリンピックの際シヌックのため一夜のうちに雪が溶けて関係者が大あわてした話。ボールダーに NCAR が建てられ、第一級の気象力学の研究者らがここへ集って来たのだが、毎冬強いシヌックに悩まされた結果、シヌックの研究をすることとなった話。など興味ある話が本題の中に挿入されている。

2. Sutcliffe 教授は前掲書への書評において“偏形樹の研究は吉野教授のペットサブジェクト”と述べているようで、著者は“これは決してペットなんてものでなくとても重要なテーマなのですよ”と言いたいのだが、まだその機会に恵まれてないようだ。第3章では偏形樹を指標とした日本及び世界各地の山岳の局地風のことが生き生きと紹介されている。なお偏形樹は風力エネルギーの位置決定の指標として役立つことが、アメリカで開かれた風力エネルギーに関する学会において指摘されている（第6章）。

このような楽しい話題が随所に出てくるので、読者は著者の講義を一度聞いてみたい衝動を持つにちがいない。勿論本書は上のようなトピックスを集めた随筆といったものではなく、本書全体を通して“風”に関する大系づけがなされていることを強調しておく。

なお、文章に無駄がなく読み易く、よく推敲された様子が伺われる。旧2著書のような専門書としてではなく、一般人、学生を対象とした教養書として広い読者に一読をお薦めしたい。

(気象庁海洋気象部・荒川正一)